

◆特集◆

## 加子母・上石津を訪ねて

名古屋市立大学大学院人間文化研究所 飯島 伸彦

八月二〇日早朝、ESD研究会メンバー（別所、飯島、三浦、林の四名）で、岐阜県中津川市の加子母集落と、三重県いなべ市上石津の二か所を訪ねた。加子母は中央高速中津川インターを降り約二〇分車を走らせ到着。途中、付知狭などの風光明媚な地域などがあり、自然に囲まれた雰囲気を持っている。しかし中津川インターからだいぶ距離があるという実感があり、同じ中部地域とはいえ名古屋からはかなり遠隔の地、環境も異なる。

ESD研究会が共催するシンポジウムの登壇者としての田口幸子さんとの打ち合わせのために訪問した。訪れた加子母総合事務所は旧加子母村の役場であるとのことである。内木所長と田口さんのお話を聞いた。この「村」は加子母むらづくり協議会のもと、域学連携に力を長らく入ってきている。その事業の連携大学としては、京都大学をはじめとする関西圏の大学から、東洋大学などの

関東圏の大学、そして名古屋大学、名古屋工業大学などの中部圏の大学が名を連ね、毎年のように夏八月に学生主体の木匠塾を実施しており、古民家再生をはじめとしたまちづくりのプロジェクトを実施し成果を上げてきた。人口三〇〇〇人程度の集落であるが、一九年目になる木匠塾の八月の時期には、学生たちが集団で訪れ、住人たちの受け入れの態勢も年季が入っているようだった。学生時代にこの土地を訪れ、木匠塾に参加した学生が、卒業後も引き続き毎年訪れるなどということも多々あるようだ。また、参加した学生が研究者となりほかの大学に就職し、そのゼミの学生たちを引き連れて参加する、というような長期的な循環も生まれているという。今はやりの多くのインターンシップは、概して短期的なもので、その期間が過ぎてしまえばその後のつながりがなくなるという性格のものが多いのに対して、ここで行われている「交流」は、もっ

とずっと腰の据わった、地域に根を下ろした「交流」であることがよく分かった。大学の多くは理科系特に建築系のゼミ・学生が多いという特徴があるが、文科系のゼミ・学生も最近増えているという。まちづくりのアイデアを出し合っていて、それが実際に取り入れられているという例もいくつかあるという。大学・学生たちにとっては、ある種の「実験の場」でもあるし、加子母にとっては大学の間の交流の場を形成しつつ、活気をもたらずプロジェクトになっていることがうかがわれた。域学連携とは短期的なプロジェクトではなく、長期的なプロジェクトであり、時間をかけての信頼関係・人間関係・地域と大学との関係形成の場なのだろう。名古屋大学、名古屋工業大学などのゼミ・学生などが参加しているものの、名古屋市立大学人文社会学部のような学部は今のところこの域学連携に関わっていない。ESDを掲げ、またまちづくり・地域形成を掲げる限り、まさにこういう場こそ長期的な視野・展望をもちながらかわらないともつたいないというのが率直な感想であった。総合事務所を離れ、大学生の交流の場となっている加子母の「ふれあいのやかた加子母」および古民家の再生などの現地なども案内をしていただいたが、

全体の印象としてとても自然に囲まれているが「文化の香りが高い」端正な集落という印象をもった。

昼食を付近の道の駅でとり、中央高速中津川インターに戻り、今度は一転して三重県へ向かった。車を走らせること一時間半ほどで東名高速関ヶ原インターを降り、さらに一五分ほどでいなべ市の上石津へ向かった。地域再生機構理事森大顕さんのお話を聞きに行った。薪ボイラーの普及のための会社を設立し、この地域における地域の循環のシステムを構築しつつある人である。そのため「木の駅」などを設置、さらに地域通貨などを活用しながら、いかに薪ボイラーの使用が簡単であり、安価であり、また日本での普及が徐々にはあるが進みつつあるかなどの現状について語っていただいた。お話を聞いた場では日帰りの温泉を実施しており、それが地域の交流の場ともなっていること、またほんわかとあったかい気分のもと、D I C (Do It Community-self) などという考え方をうかがっているうちに、まさにE S D研究会で模索している持続可能な「内発的な発展」のモデルとなるような事例が名古屋に身近なこの地域にも根付きつつある、ということを実感することができた。加子母の事例と上石津の事例、

それぞれ違いはあるが、加子母も上石津もともに中部における「里山資本主義」の可能性を実感できるモデルであると強く感じる事ができた「旅」であった。



加子母集落の風景